



猫をかぶる



河村 恵

走る女がいた。

皮がはがれかけていたので、

「はがれてますよ」

と言おうとするが真剣な顔をしていたので言いそびれる。

小さな子どもを6,7匹抱えて走っていた。

厚化粧で、色が白く、目が細く、髪型こそは人間らしいが、はがれていた。

女は通勤の朝によく見掛ける女だ。

いつも切羽詰まったような追われるような様子で目に付いた。

「あっ」

女がつかずくと一気に皮がはがれ、四つ足でものすごい速さで走り去っていった。

女は白狐だった。

くしゃくしゃになって落ちている皮を見ると、私は衝動に駆られた。

私は周囲を確認し、とっさに皮を拾い上げ、バッグに入れた。

午後になると会社に直帰する連絡をいれ、いそいそと帰ってきた。

まず、部屋で皮を縫い合わせ、かぶる。

皮はひんやりとしていて肌にぴたっと吸い付いてきた。

皮は白かったが張り付くと肌と皮の境目がわからなくなった。

鏡を覗いても、姿は人間のままだったので、

「なーんだ」

と、呟いたはずが、

「みゃーお」

としか言えない。

思わず、もう一度、鏡の中を覗くと、三角のかわいらしい耳が頭の上にピンと付いている。

頭に手をやり、触るとふわふわした毛まで生えている。

人間の耳も元の位置についているので、耳が四つになったのである。そのせいか、先ほどから小さな音が気になり始めていた。エアコンの音、時計の秒針のカチカチと言う音がやけに気になる。

気を取り直して、夕食に煮物とアジの開きを焼いた。

アジの焼ける匂いがたまらなく感じた。

グリルを開け、アジをひっくり返そうとするが、菜ばしがうまくつかめない。

「あれっ」

と思うと、

「ミャー」

という声になり、右手をみるとかわいらしい肉球が小憎らしいほどリアルについていた。

左手はまだ人間らしい手だったので、左手で菜ばしをつかみ、やっとのことでひっくり返した時には、こげていた。

「みゃーみゃー」

と文句にならない文句を言いながら一人で食べた。

みゃーとしか言えないくせに、いつも通りにテレビを見ながら食べていた。

気がつくやうに、舌に骨が刺さった。

鏡の前に恐る恐る立ち、口をあけると舌の真ん中に大きな骨が刺さっている。エイッと力いっぱい抜こうとすると、痛みが走って涙がでた。

仕方なく諦めて、とりあえず歯を磨くことにした。

肉球にも少し慣れてきた。

このまま寝てしまうと、明日の朝には完璧に猫になってしまうと思い、ながらも何も手につかず、ベッドの上でごろごろしながら考えた。

「ああ、化けの皮を脱げばいいんだ」

という単純な解決策にやっとなどり着き、腕まくりをした。

少しふさふさとした猫毛が生えてきていたが、まだ人間らしい肌色も健在だ。

肌色の皮膚をつまむ。痛い。

猫毛を引っ張る。やはり、痛い。

悲しくなり、もうどうにでもなれと寝てしまった。

夜中に怖い夢を見て目を覚ました。

いつもあおむけに寝るはずが、今は丸くなっている。

ますます猫めいてきた自分に気付き愕然とした。

翌日は会社へはいけないな、なんと言って休もう？いや、休んでもどうにもならないなら辞めてしまったほうがすっきり諦めがつく。友人、両親にはどう話そうか。

ああ、ミャーとしか言えないんだった。手紙を書こうか？はて、字はかけるかな？

そんなことをぐるぐる考えているうちに眠ってしまったようだ。

「ジリリージリリ」

けたたましくなる目覚し時計にびっくりして手をのぼすが、的外れなところにしか手が届かない。

バシン

やっとのことで時計をたたきつけると手の短さに驚いた。

「ミーヤ」

と伸びをして、恐る恐る蒲団をはがすと、全身猫になっていた。

三毛になるような予感がしていたが、違っていた。

全身グレーの短い毛で覆われ、目は黄色く、足先だけがなぜか白く、靴下を履いているようなしゃれた模様だった。

私は人の頃から寝起きが悪く、起きてからもしばらくぼーっとしないといけない。

いつものようにぼーっとしていたつもりが、腕をぺろぺろとなめていた。

そのとき、舌に刺さった骨が毛づくろいに役立つことに気付いた。そんな猫の気持ちが体験的にわかってしまうことにますます悲しくなった。

人間らしいことと言えば、二足で直立することだけは、できた。

キッチンには、お弁当用に昨日焼いておいたアジがあったので、しばらくはそれを食べることにした。

気が晴れないので、散歩に出る。

田中さんはゴミ出しをしている、

杉田さんはご主人と喧嘩なんかしている、

スズメは隣の庭の巣箱でちゅんちゅんとさえずっている、

木村くんのおぼっちゃんまは名前の知らないいつもの友達と試験勉強の話をしている、

毎朝見かける仲のいい老夫婦は一緒に楽しそうに散歩している。

どうも知った顔が多すぎて、劣等感に浸ってしまい、すごすごと戻ってきた。
どうにか、あの化けの皮がはがれないかと思案し、白狐の女を捜してみることにした。

女は毎朝、7時50分に駅前を通る。
時間に合わせて駅前に行くところまで歩いていた。踏み潰されそうになりながら、歩いていた。

女を見つけ、信号待ちをしているときを狙って、足元にすり寄ってみた。
最初は少し動揺した表情を浮かべたが、知らないふりをする日が三日続いた。
四日目にも、しつこく擦り寄ると、女は人気のないところへ行く。
付いていくと、話し掛けてきた。

「どうしてそんな姿に？」

「ミャオミャオ」

「あの日、化けの皮を拾ったのはあなたなのね？」

「皮を脱ぎたい？少し痛いけど平気？」

「じゃあ、ついてきて」

女は猫の言葉がわかるらしかった。

何日か振りに「人」と会話をできたことに少し安心した。

公園の植え込みに近いベンチに女が座る。

私も抱きかかえられ、ベンチに猫らしく座る。

女は革の匂いのぷんぷんする黒いバッグから、はさみを取り出し、猫のしっぽをつかんだ。ものすごい力で尻尾を押さえつけられじんじんしてきた。

全身の猫毛が逆立つ。

「ちょっとだけ我慢してね」

はさみがぎらぎらをひかりながら視界の隅に消えた。

チョキン

全身に激痛が走った。

「大丈夫よ」

「ドコガタイジョウブナンデスカ、イタイデスヨ」

さらに女がチョキチョキと切ると、むにゅっという変な音とともに皮がはがれ落ち、人間の姿に戻った。

すぐに痛みは治まり、

「ありがとう」

と言おうと振り向くと女の姿はなかった。

近くに小さな動物の足跡だけが残っていた。